

コラム 中南米

今年三月、かけ足でまわった中米3カ国（コスタリカ、グアテマラ、パナマ）は忘れられない旅となつた。もともと出張目的はコロンビアとの比較の視点から、中米諸国のコーヒー産業組織と労働形態を見るにあつたのだが、行ってみて「比較」する」と自体absurdo(ナンセンス)なことがよくわかつた。理由は、一言でいえば初期条件の違いが大きすぎる、に尽きる。

が、同じ小農主体のコーヒー農園分布であつても、収穫期に働く出稼ぎ農業労働者は、人口の六〇%を占めるインディヘナであり、これを campesinos asalariados と同一視できるかどうか、の問題にかかわってしまう。

これはメヒコ、ペルーなどインディヘナ文化の根強い地域を知った者なら当然の現

アメリカナイズされた消費文化社会である。これも地理的位置、政治環境からみてまた当たり前のことなのだが、中米諸国内の相違についても細かい神経をもつて見る必要があるう。

运河と金融部門で経済の七割を外としても、コスタリカ、グアテマラ

内市場の小ささ、生産・流通過程の要たる組織基盤の弱さをとっても、コロンビアのコーヒー生産組織をバイヤスに分析するの

かつその上に文化の違いが土地利用、労働形態を規定していることも見逃せない。

中米の
「規模」と文化



幡谷則子

Semana Santa ۲۰۱۷

(penitencia)を象徴する色である。そしてなぜかこの季節は決まってハカラシダが一斉に同じ紫の花をさかせるのである。ラテンアメリカではその多くが失われてしまつたキリスト教の伝統の重みを久かたぶりに見た思いであつた。

(在ボゴタ海外派遣員)